

「ものづくり」を介した個性の発見・発信を支援と共生につなぐ創造の場 GoodJob! センター香芝

A PLACE OF CREATION THAT DISCOVERS AND DISSEMINATES INDIVIDUALITY THROUGH
"MANUFACTURING" AND LEADS TO CARE FOR AND COEXIST WITH PEOPLE WITH
DISABILITIES

GoodJob! Center Kashiba

橘亮輔^{*1}, 松原茂樹^{*2}, 山田あすか^{*3}

TACHIBANA Ryosuke, MATSUBARA Shigeki and YAMADA Asuka

The social welfare facility in Nara Prefecture focuses on the way that people with disabilities work under the theme of "manufacturing." This facility proposes a new way of working that integrates "discovery" and "communication" by creating a place to discover the individuality and potential of users and disseminate it to the outside. This facility also function as hubs for the exchange of art among various people, and architecturally support the creation of new ways of working by adding shops, galleries, and cafes as well as manufacturing venues. As a result, this facility will bring about a change in people's attitudes towards individuals with disabilities in the community.

*Keywords : Manufacturing, Support for continuous employment, People with disabilities,
Working*

ものづくり, 就労継続支援, 障害者, 就労

序

障害者就労支援事業所は、様々な障害により一般企業への就労に不安や困難をもつ者に、支援を受けながらの就労機会や仕事に必要な能力や意欲を身につけていく就労訓練の機会を提供する。工場の下請けなどの単純作業（いわゆる内職などの軽作業）やクリーニング、小分け・袋詰めなどの流通、清掃業務などそれぞれの事業所で業務が設定され、近年では農福連携など人手の足りない業種との連携も注目されている。なかでもいま、従前の「作業」とは様相を異にし、アートや地場産業と連動したものづくりを事業として利用者の主体性や個性の発見や強化をコンセプトとする事業所がみられる。また、こうした事業所において建築的な特徴づけやブランディング、環境づくりを行って、利用者や職員、地域にとってもデザイン性やシンボル性があり愛着や誇りを持てる場所として整備・運営を行っているケース

もある。こうした取り組みへの理解と着目は、就労支援施設そのものの場と支援内容の理解、障害者と人・地域・社会とのつながりをより一層強化する。さらには、地域に拠点を置く福祉施設の担う役割・機能の再編や、就労支援施設関連の施策で重視されている個性を活かした仕事のあり方を再考するきっかけとなりうる。本稿では、奈良県香芝市の「GoodJob! センター香芝（社会福祉法人わたぼうしの会）」を取り上げ、施設の見学と代表者に対するヒアリングを実施した結果を報告する。

1. 社会福祉法人わたぼうしの会 GoodJob! センター施設概要

1.1 事業概要

奈良県香芝市に拠点を置く「GoodJob! センター香芝」は、社会福祉法人わたぼうしの会が運営する障害福祉サービス事業所であり、施設内に就労継続支援A型事業、

* 1 東京電機大学大学院未来科学研究科建築学専攻 修士課程

* 2 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 准教授・博士（工学）

* 3 東京電機大学未来科学部建築学科 教授・博士（工学）

*1 Master Stud., Architecture and Building Engineering, Graduate School of Science and Technology for Future Life, Tokyo Denki Univ.

*2 Assoc. Prof., Division of Global Architecture, Graduate School of Eng. Osaka Univ. Dr. Eng.

*3 Professor, Dept. of Architecture, School of Science and Technology for Future Life, Tokyo Denki Univ., Dr.Eng.

就労継続支援B型事業、生活介護事業の3つの事業所と、地域開放された、誰でも利用できるカフェが併設されている（表1）。

1.2 事業内容

1) 運営理念と3つの方針

GoodJob! センター香芝では、障害のある人とともに、アート・デザイン・ビジネスの分野を超えた新しい仕事のあり方の創出を目指している。そのうえで、1. アート×デザインによる新しい仕事の創出、2. 異分野をつなぐプラットフォームの構築、3. 所得の再配分から可能性の再配分へ、という3つの方向性が定められている。

この方針に基づき、GoodJob! センター香芝では、障害者の働き方のあり方を見直し、障害者と、デザイナーやアーティスト、企業や自治体など様々な分野に携わる人をつなぎ、協働する。これによって、一人ひとりの個性や可能性をものづくりを通して存分に発揮し、社会へ発信することのできる、ものづくりを基盤とした新たな仕事のあり方を提案している。

2) 特徴ある取り組み

わたぼうしの会が実践するものづくりを基盤とする新たな仕事のあり方の一つに、2007年に一般財団法人たんぼの家をはじめとする3つのNPOが共同で設立した「エイブルアート・カンパニー」の取り組みが挙げられる。障害のある人のアートを仕事につなげるため、2年に一度の周期で自らの表現の可能性を広げたいと考えている作家を公募により募集し、エイブルアート・カンパニーと契約した作家が手がけたイラスト作品を印刷物やアパレル製品をはじめとする様々なデザインに使用し、実績に応じた著作権使用料を作家に支払うことで、作品発表の機会と作家の創作環境の持続支援を行うしくみである。2025年3月1日現在、登録作家数は122名、登録作品数は12,881点となっており、過去には書籍の表紙や看板・ディスプレイ、商品パッケージ等のデザインに作品が使用されている。

3) ネットワークのハブとしての役割

また、障害者のアート・アイデアをデザイナー・企業とつなぎ商品の開発・製造を行うだけでなく、アートを発信する流通拠点としての役割を担い、他の福祉施設で製造された商品の販売・管理を行うなど、様々な分野の企業・施設をつなぐネットワークづくりにも取り組んでいる。さらに、創作活動を通してコミュニケーションや交流が生まれるようプラットフォームの構築にも力を入れている。施設開設以降、全国各地で当施設の取

表1 施設概要（GoodJob! センター香芝）

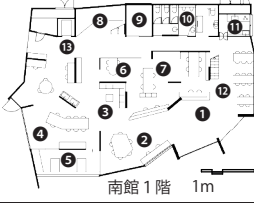
施設	GoodJob! センター香芝	
所在地	奈良県香芝市下田西 2-8-1	
運営	社会福祉法人わたぼうしの会	
開設年月	2016年9月1日	
平面図		① エントランスホール ② アトリエ ③ ギャラリー ④ アトリエ2 ⑤ 工作室 ⑥ 相談室 ⑦ オフィス ⑧ 倉庫 ⑨ 静養室 ⑩ トイレ ⑪ キッチン ⑫ カフェ ⑬ EV
		① ショップ ② 倉庫 ③ 作業スペース ④ ホール ⑤ 休憩スペース ⑥ 水回り ⑦ 倉庫2 ⑧ パレコニー ⑨ EV
建築規模	南館：木造2階建て、北館：木造平屋建て	
面積	敷地面積	南館：795 m ² 、北館：703 m ²
	建築面積	南館：311 m ² 、北館：220 m ²
	延床面積	南館：471 m ² 、北館：220 m ²
運営事業	就労継続支援A型事業、就労継続支援B型事業、生活介護事業	
定員人数	継続支援A型：10名、継続支援B型：22名、生活介護事業：8名	
建築の特徴	ものづくり・流通の拠点である南館と、表現を生み出す場である北館の2つの館で構成されている。施設の建築コンセプトは「街並みをつくるアートの森」であり、施設内部には様々な素材の壁が様々な角度で、交互に積まれるように配置されており、不規則な壁の配置により様々な空間・居場所が生み出されている。また、様々な空間の中に個人の居場所がありながらも、誰かの気配を感じることが出来るよう配慮した計画となっている。	



写真1 建物外観（南館）



写真2 建物外観（北館）

り組みを紹介するセミナーや、利用者が手がけた作品や製品を展示するイベントを定期的に開催するなど、障害のある人のアートや創作活動を社会へ発信する機会を積極的に設けており、アートを介したつながりによる支援の形成や活動への理解の促進を図っている。

2. 施設・建物について

2.1 建物の構成

当施設は角地に立地するものづくり・流通の拠点である南館と、表現を生み出す場である北館の2つの館で構成される(写真1・2)。

主要な活動拠点である南館には、アトリエや工作室などの創作スペースに加え、カフェやギャラリー、ショップなどの滞在・交流スペースが併設されており、この南館は誰でも気軽に立ち寄ることのできる、地域に開かれた場として計画されている。北館は南館から70m程離れた敷地にあり、障害のある人たちが創作活動に励むためのアトリエや、活動の幅に合わせて多目的に利用できるホールが設けられている。また、北館はダイケアサービスを提供する場としても機能しているため、静養室や休憩スペースなどを充実させた計画である。

2.2 設計案の検討プロセス

1) 建築コンセプトの提案

就労支援施設を計画するにあたって、障害特性により居場所へのこだわりが強い人や、個人での作業、複数人での作業を好む人など、様々な利用者が想定された。そこで、建築案提出当初より建築コンセプトを「街並みをつくるアートの森」と定め、明るい原っぱのような空間、少し薄暗く落ち着いた空間など、「森」のような多様な空間をつくり出すことが提案された。これによって、誰もが好きな場所を選んで居場所とし、思い思いの過ごし方ができるように建築空間がつけられた。

2) コストコントロールの検討

南館の設計案の検討段階で、建築面積を大幅に縮小し、同時に開口部の面積も削減した結果、建築コンセプトである「森」のような賑やかで柔らかな印象が薄れてしまった。そのため、2階建てから平屋の案に変更したものの、吹き抜けがなくなったことで、壁面と構造が一体となった壁柱の機能と、空間の個性が弱まったため、再度大きな転換を検討し、現状の空間が実現された。

3) 機能の再配置

周辺環境と建物の機能の関係性を見直しに伴い、南館・北館のそれぞれで機能の再配置が行われた。主な

変更点として、南館2階に配置していたアトリエを1階に移動し、カフェやギャラリーと連携して地域に開く、現在の形に近づけられた。また、2階では吹き抜けの設置により分散していた廊下をまとめ、倉庫機能を配置することで、動線空間の有効活用化が図られた。

4) 多様な空間の設置

建物内部の構造体として取り入れていた壁柱の考え方を改め、ファサードにも採用することで、建物の外側にも滞在できる場所が生まれ、まちと建物がゆるやかにつながる計画となった。最終案では、壁柱が様々な大きさ、素材、角度で寄り集まり、これらが生み出す多様な空間で行われている活動が、開口部を通して立面に現れて街並みに参加する風景がつけられた。また、ファサードとして現れる壁柱が内と外の境界を曖昧にし、まちの人や出来事を引き込む構成となった。

また、当初コンセプトの「森のような多様な空間」は、個人が居場所をもちながら思い思いに過ごしつつ、誰かの気配を感じられる、空間に見え隠れや柔軟性のあるワンルーム空間として実現した(写真3)。

2.3 施設の諸室・空間構成

1) アトリエ (南館1階)



写真3 南館 壁柱が生む多様な空間



写真4 南館 アトリエ

ものづくりに特化した主な活動場所であり、専門機材や器具が揃えられ、中央の机では自主製品の絵付けや色付け作業、デザインの考案・会議、企業や団体との商品開発・ワークショップなど、様々な創作活動が行われている（写真4）。事業所全体でデジタル技術を活かした商品の開発にも積極的に取り組んでおり、アトリエ内には3Dプリンタやレーザーカッター、カッティングプロッターなどの特殊機材も揃っている（写真5）。

施設内各所には、GoodJob! センターで作られた様々な形で色とりどりの張り子が飾られている（写真6）。この張り子は継承者がおらず閉じられようとしていた近隣の工房から制作を引き取ったもので、最も手間がかかり技術が必要な「木型」造りを3Dプリンタでの制作を置き換えることで事業継承に成功した経緯がある。このように作成した型を元に利用者らが手作業で成型し、絵付けを施して、製品をつくっている。このように、就労支援と新技術、そして手仕事を組み合わせることで、地域の歴史的文化を継承しながら新しいものづくりを実践している点は特筆すべきである。

2) ギャラリー（南館1階）

建物内の不規則に配置された壁柱は、多様な空間を生み出す。また、この壁柱やそれが生む空間は展示スペースとしても活用されており、絵画を中心とした作品が施設内の至る所に展示されている（写真7）。壁柱沿いには椅子が置かれ、施設の利用者が作業中の気分転換や休憩ができる。展示スペースは施設内で制作された作品の展示だけでなく、企画展やワークショップを通して地域との交流を生み出す場としても機能している。

3) カフェ（南館1階）

施設の1階には、利用者らの憩いの場や地域住民の食事や交流の場として利用されているカフェスペースがある（写真8）。カフェの接客や調理も施設利用者の



写真6 GoodJob! センター香芝で作られた張り子たち

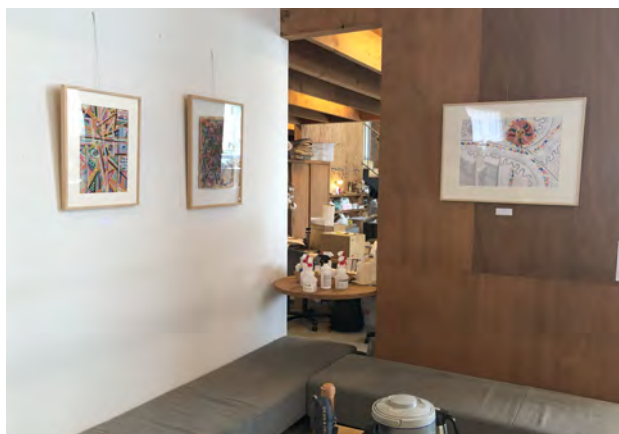


写真7 南館 ギャラリー



写真8 南館 カフェ



写真5 南館 アトリエ内の3D プリンタ



写真9 特製ホットドッグ「Good Dog」

仕事内容の一つであり、利用者らがスタッフとともに働いている。天井から吊り下げられている 12 面体スピーカーと吹き抜けの組み合わせが心地の良い音響空間を生み出している。

また、カフェの看板メニューであるホットドッグに使われている米粉のパンや珈琲豆は、同県内の別の福祉施設から仕入れており、事業者間での連携も行われている（写真 9）。

4) ストックルーム（南館 2 階）

ストックルームは流通拠点であり、利用者とスタッフが当施設で制作した商品や、他の福祉施設（就労支援事業所）で制作された商品の保管・在庫管理、商品撮影を行っている（写真 10）。150 以上の福祉施設から仕入れられる 1,000 種類を超える商品は、「フェイス」と呼ばれるダンボールを再利用した手作りのボックスで管理されている（写真 11）。この商品の撮影や商品の在庫管理・セレクトも利用者らの仕事の一つである。商品撮影では、オンラインショップに掲載する商品のアイキャッチ画像を、元々写真撮影が趣味だった利用者が 1 枚 1 枚丁寧に撮影している（写真 12）。利用者が自分の好きなことや得意なことが仕事に活かせるような環境づくりが行われており、1 週間ごとの売り上げをボードに記入することで仕事のモチベーションを向上させている。

設計段階で多くの議論・検討を行った 2 階の廊下部分は、吹き抜けを残しつつ、廊下を中央部にまとめることで、車椅子利用者も移動しやすい空間としている。また、廊下に面して倉庫機能や見本整理、商品展示のゾーンを配置することで、単なる動線空間としてだけでなく、流通拠点の中核たる機能を担う場となった。

5) ショップ（南館 1, 2 階）

当施設で制作された商品や、他の福祉施設（就労支援事業所）で制作された商品のセレクトショップスペースである（写真 13）。食器類や文具類、バッグなどの革製品のほか、小物、雑貨、アート・福祉に関する書籍など、幅広い分野の商品が並んでいる。また、1 階の入り口部分にも衣服を中心とした商品が並んでおり、2 階のショップの商品とともに 1 階のカウンターで購入することができる。

福祉施設の中には、日課活動の一環としてものづくりを行っている事業が多いものの、その成果は必ずしも商品として広く世に出されない。その課題は、製品化と流通（売買）までを個々の施設で運営するにはノウハウ



写真 10 南館 ストックルーム



写真 11 フェイスとストックルームの商品

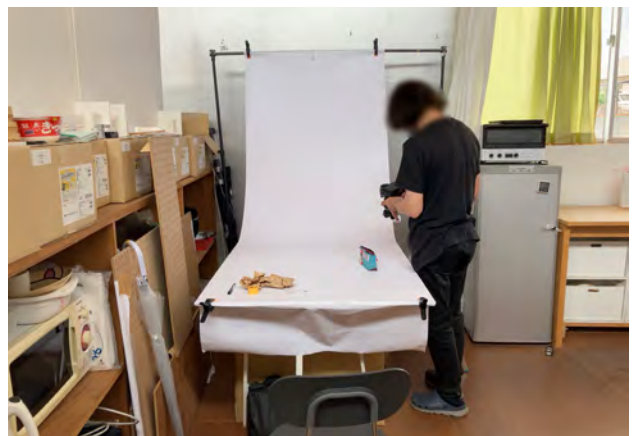


写真 12 商品撮影の様子



写真 13 南館 ショップ

や人手（事業コスト）が不足することにある。そこで、当施設がオンラインショップや全国のショップへの卸売など流通のパートを担うことで、障害のある方々のアートを社会へとつなげるサポートを行っている。制作者の名前を明らかにし、それをブランディングの一部に取り入れた商品もあり、制作者や家族の自信の創出や障害者は匿名化される存在であるという偏見の払拭にもつながっている。

6) 外部空間（南館）

不規則に配置された壁柱が生み出す軒下空間には、誰でも自由に利用できるベンチが設置されている（写真14）。このベンチは、日中は施設の利用者が作業の合間に休憩したり、施設を訪れた地域住民が滞在する場所として使われている。

7) アトリエ（北館）

北館には壁に囲まれ独立した空間であるアトリエ1と、ホールとひとつながりとなった見通しの良いアトリエ2があり、利用者はそれぞれの活動内容や好みで活動場所を選ぶ。南館と同様に、創作活動に必要な画材や道具が揃えられた新しい表現が生まれる創作スペースであり、利用者はそれぞれの創作活動に打ち込んでいる（写真15・16）。

アトリエ1では、スタッフと利用者が蚕を育てている（写真17）。利用者らが蚕の生態や絹などの文化や歴史、絹糸を使ったものづくりに触れながら、生き物を育てる大変さと、天然素材のありがたみを実感し、日々のものづくりに新たな視点や広がりを得ることをねらいとしている。アトリエ1前の廊下にあるホワイトボードには、蚕を迎えることをテーマにして利用者が作った歌が書かれている（写真18）。

アトリエ2では、障害者の表現活動の場としてオープンアトリエ「mirumiru」を実施している。これは、障



写真15 北館 アトリエ1



写真16 北館 アトリエ2



写真17 北館 アトリエ1で育成中の蚕



写真14 カフェの外の軒下空間

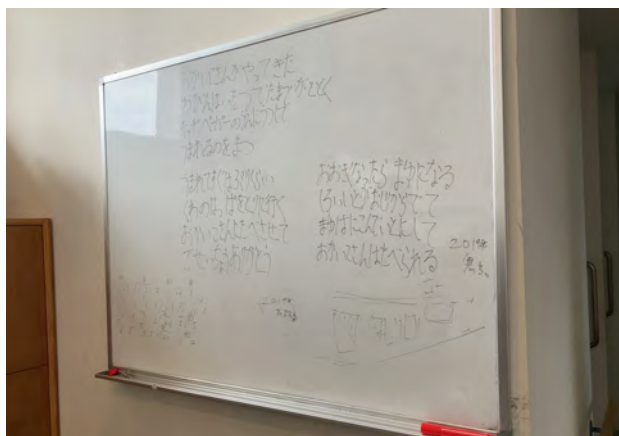


写真18 北館 掲示されている蚕のうた

害のある人が学校を卒業すると、表現活動をする場が減ってしまうというアンケート結果を受けて発足した創作活動の場で、月に1度、奈良県や大阪府などから参加者を募って実施している。創作活動の他にもお花見やバーベキュー、ハイキングなどの季節のイベントも開催されている。

8) 静養室・休憩スペース（北館）

アトリエ1には静養室、休憩スペースが隣接している（写真19・20）。活動にメリハリをつけられるよう、ほかの諸室と比較して開口部が少なく、明るすぎず落ち着いた空間となっている。休憩スペースには本棚があり、毎月図書館から100冊ほど借りて配架されている。定期的に本が入れ替わるので様々な本との出会いの仕掛けとなっている。

9) トイレ（南館・北館）

南北両館に男子／女子トイレに加えバリアフリーな多目的トイレが設置されている（写真21）。このトイレのサインを含め施設内のサインは大阪府を拠点に福祉・地域に関わるデザインを手がける事業と協働で制作されており、たんぽぽの家で活動する利用者のイラストと文字をアレンジした、オリジナルデザインである（写真



写真21 北館 トイレ



写真22 トイレのサイン計画



写真19 北館 静養室



写真23 北館 ホール



写真20 北館 休憩スペース



写真24 ワークショップの例

22)。

10) ホール（北館）

北館のホールに置かれた複数の丸テーブルと椅子は、イラスト制作や刺繍などの創作活動、ダンスや音楽などのパフォーマンス、食事や休憩など、多種多様な用途で使用されている（写真 23）。

また、「はたらくことは大切、また、いろいろなことを経験しながら好奇心を持って社会や人と関わっていくことも大切」という視点から、月に1度ファシリテーターを招き、様々な内容のワークショップを開催している（写真 24）。利用者は、新聞を読む／うた／音を聞くなどのワークショップの中から関心のあるものやスタッフが勧めるものに参加する。プログラムを通して新たな発見や気づきが生まれ、アートを通したコミュニケーションや表現力、創造力を高めることが企図されている。

3. まとめと考察

3.1 ものづくりによる新たな働き方の創出と建築的支援

GoodJob! センター香芝では、障害者の働き方のあり方を見直すため「ものづくり」の視点に着目し、障害のある人も一人のアーティストとして、主体的に商品の開発・製造に携わることで、一人ひとりの個性や可能性をものづくりを通して存分に発揮し、社会へ発信することのできる、「つくる」「はたらく」「発信する」が一体となった、新たな働き方のしくみを創出している。働き方の創出に伴い、施設にはものづくりやワークショップを行う「つくる」工房やアトリエ、商品の管理や保管、接客を行う第二の「はたらく」場であるカフェやストックルーム、商品の販売、作品の展示を通して個性を「発信する」ショップやギャラリーなど、それぞれに対応した機能を取り込むことで、建築的に新たな仕組みを支援している。ものづくりに留まらず、それが地域的な文化の継承や流通を含んだ社会と障害のある利用者の活動をつなぐ活動まで展開していることが特徴である。

3.2 支援と共生へつなぐ新たなものづくりのあり方

ものづくりには、草案・デザインの提案から実際に商品化し販売するまでの間に、スタッフやデザイナー、専門技術を持つアーティストなど、様々な分野・属性の人が関わる。このことを多様な関わりを生む契機と捉え、就労支援におけるものづくりを単純な作業工程としてではなく、「様々な人やものとの関わりの中で、一人ひとりの持つ個性や可能性を発見する機会」と位置づけ

ている。

そして、この就労支援（ケア）×関わり×発信の場となる事業所を、障害をもつ利用者だけでない多様な人々が、ものづくりを介して社会や地域、アートや人とつながることのできる交流拠点としても機能するよう設定している。これが利用者個々の持つ個性や可能性の発見に加え、それを支援しながら周りの人たちの個性や可能性、考え方や表現方法の発見を促進し、各々の個性を認め合いながら協働することのできるものづくりの場の実践へつなげている。

3.3 考察

「作業」のみの事業展開とは異なり独自のブランドや価値をつくることを重視し、「つくる」「はたらく」「発信する」を一体化した就労支援事業を運営し、かつここに建築的な特徴付けもなされたケースは、従前の「福祉事業所」のイメージを変えていく存在でもある。こうした変化が、地域と共に福祉事業を展開していく姿勢の醸成や、利用者自身のプライドを尊重し家族などからも忌避感やスティグマへの懸念なく福祉事業を利活用して自身のQOLを高めていく姿勢にもつながる。そのためにもこのような、ある種の「おしゃれさ」がこれからの福祉には重要なだと述べる事業者もいる。これは翻って、「福祉なのだから、しゃれっ気があったり周囲の建物よりも立派に見えることは相応しくない」とする偏見への反発、現代的価値観へのアップデートであるとも捉えられると考えられる。建築的にも、活動内容においても、オリジナリティやアート性が重視された環境での「支援のあるものづくり」の場には、福祉のあり方や福祉への意識を変えていく大きな可能性がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に、篤く御礼申し上げます。なお、本研究は、東京電機大学総合研究所研究課題 Q23E-03 「付加的空間の開かれ」を含む、個性化・包摂化・コモنز化による公共機能再編の検討（研究代表者：山田あすか）」の一環として行われました。

参考文献

- 1) GoodJob! センター香芝 < <https://goodjobcenter.com/> > 2025.3.1 参照
- 2) Able Art Company < <https://ableartcom.jp/> > 2025.3.1 参照
- 3) たんぽぽの家 < <https://tanpoponoye.org/> > 2025.3.1 参照
- 4) 新建築 データ_GoodJob! センター香芝 < https://data.shinkenchiku.online/projects/articles/SK_2016_11_074-0 > 2025.3.1 参照